

かりすま

登場人物

青井閃之介……………紀伊国屋文左衛門を凌ぐ豪商になる事を目指す男

万吉……………閃之介の片腕
お涼……………閃之介の手下

金太……………万吉の弟分
おばば……………閃之介の手下

お梅……………遊女
作治……………江戸に直訴に来た百姓

弥助……………お梅の客
市松……………江戸に直訴に来た百姓

おふさ……………遊女
お志乃……………作治の妹

おくに……………遊女
源八……………虎蔵の子分

おせん……………遊女
六助……………虎蔵の子分

お滝……………遊女
権太……………虎蔵の子分

お若……………遊女
大野屋……………呉服屋の主人

闇雲堂……………瓦版屋
お佳代……………大野屋の娘

虎蔵……………岡場所の元締め
お光……………成田屋の妻

長吉……………少年
良治……………成田屋の息子

留……………大工

松……………左官

お徳……………蜷売りの女

高倉主水……………同心

佐平……………岡引

時は元禄年間。夜、江戸の東にある岡場所。舞台の上手下手は手前から奥に遊郭の建物。舞台手前は上手下手それぞれに出はけ口。舞台奥、中央に木戸門。門の更に奥には幅のある階段。階段の上は土手になっており上下それぞれに出はけ口。遠くに花火が上がって歓声やどよめき。土手の上に、花火見物の群集シルエツトになっている。舞台手前、上手口より女の手を引っ張りながら男、駆け出してくる。

お梅　　弥助さん、弥助さんちよっと待っておくれよ。

弥助　　何だよ、

お梅　　何だよって、何で今なのさ。

弥助　　だから言ったろ、みんな花火に夢中だ、今だったら逃げ出せる。

お梅　　そうじゃなくて、半年待てばあたしは年季があけるんだよ。そうすりゃあ大手を振って、

弥助　　お梅、お前俺に惚れたって言ったよな。

お梅　　言ったよ、言ったけど、

弥助 だったらつべこべ言わずについて来い。

お梅 (小声) だって、客と女郎の好いた惚れたは挨拶じゃないか。そりや弥助さんいい人だけど、

弥助 何だ、

お梅 だから、弥助さんあんた酔ってるんだよ。

弥助 違う、俺は、俺は死ぬ覚悟だって出来てる。

お梅 えっ、

弥助 惚れたお前が他の男の相手をしてる、そんな事、俺には一日だって我慢出来ねえ。

お梅 弥助さん、

弥助 そりやあ俺に甲斐性があれば金を工面してお前を身請けする。だけど、それが出来ねえんだったらこうするしかねえだろ。よしんば捕まったところで、お前と死ねるんなら俺は本望だって言ってるんだよ。

お梅 弥助さん、本気で言ってるのかい。

弥助 あたりめえだ。

お梅 弥助さん、

弥助 お梅、

下手より、追手の万吉と金太、手下数人を連れて飛び出して来る。

万吉 茶番はそこまでだ。

弥助 お梅逃げろ、

金太 おっと、（お梅を捕まえる。弥助も手下達に道をふさがれる）

お梅 弥助さん、

弥助 くそ、（金太からお梅を助けようとするが取り押さえられる）何すんだ、

万吉 熱くなるのもてえげえにしやがれ。

金太 お梅姉さん、足抜けなんてそう簡単に出来るもんじゃねえぜ。

お梅 足抜けって、あたしはそんなつもりじゃ、

弥助 ちくしょう、

お梅 弥助さん、

弥助 くそ、放せ、放せ、

金太 色男、金と力は無かりけりってか。

万吉 いいか若造、岡場所の女は売り物だ。人様の物を盗んで只で済むとは思
うなよ。

金太 姉さん、もうちつとの間辛抱してれば年季が明けたのに。

お梅 そんな事分かってるよ、だからあたしは、

万吉 この背中、青竹が割れるまで叩かせて貰うぜ。

お梅 ちよっと待っておくれよ、

金太　かんべんな。

万吉　傷が治ったら又稼いで貰う、年季が明けるのはそれから半年後だ。

お梅　だからあたしは、

弥助　待て、勘違いするな、お梅は俺が無理に連れ出したんだ。

お梅　え、

弥助　一緒に逃げなかったら殺すと脅して、無理やり連れ出したんだ。

お梅　弥助さん、あんた、

万吉　面白え事言いやがる。

金太　花火見物に紛れてどうのこうのって、二人で逃げる算段してたのは、板場の奴等がちゃんと聞いてんだよ。

弥助　そいつは何かの間違いだ。半年したら年季の明けようって女郎が、喜んでついて来る道理がねえだろ。

万吉 お梅、こいつおめえをかばってくれてるぜ。

お梅 弥助さん、

弥助 そんなんじゃないやねえ、本当の事を言ってるだけだ。

万吉 立派なもんだ、最後までいい男面しようってか。

金太 この野郎、

弥助 だから本当に俺が連れ出したんだ。

万吉 そいつが本当なら、おめえはお梅をかどわかせた事になるな。

弥助 そうだ、俺はお梅をかどわかせた。

お梅 弥助さん、あんた、

弥助 俺がこいつに横恋慕して、嫌がるのを無理やり連れ出したんだ。だから、お梅は勘弁してやってくれ。

万吉

そうかい、客と女郎の色恋沙汰なら内輪の仕置きで始末はつくが、なあ金太、かどわかしとなると話は違ってくるよな。

金太

そうさな兄貴、まずは伝馬町送り、その後は良くて遠島、へたすりや獄門さらし首だ。

万吉

それでいいんだな。

弥助

ああ、覚悟は出来てる。

万吉

上等だ。

お梅

弥助さん：あたし、あたし本当にあなたに惚れたよ。

弥助

お梅、

お梅

あんた一人、あんた一人死なしやしない。

万吉

金太、色男を番屋へしよつ引きな。

金太

あいよ。

お梅 違うよ、違うんだ。あたしと弥助さんは、

万吉 お梅、おめえも立つんだ。

お梅 待っとくれ、あたしは自分から逃げたんだ。

万吉 おめえは今夜お茶ひいてた事にしてやるよ。

お梅 だからかどわかされたんじゃない、承知の上で逃げたんだ。

弥助 お梅、何も言うな。

お梅 何言ってるんだい、弥助さん。

弥助 達者でな。

お梅 待っとくれ、

万吉 金太、早くそいつを番屋へ連れてけ。

金太 へえ、

お梅 待つて、待つておくれよ。

万吉 さあ、来るんだ、

お梅 梃子でも動くもんか、

万吉 お梅、

お梅 弥助さん、(引き離される二人)弥助さん、

弥助 お梅、

大きな花火が上がり、土手の上、光に照らし出される閃之介。女郎達に囲まれている。

閃之介 「宮古川、女衞の天に夢花火、えにし儂き女郎花かな」てな、

おふさ いやっ、閃様、

おせん 日本一、

お若 閃之介様ステキ、

おくに 粋なお歌でありんすね。

お滝 何いってんの意味も分かつちやいないくせに。

おくに ねえ閃様、いっそ今夜はこのままあたしとしつぽり、

おせん おくに姉さん、閃様にはあたしみたいな若い子じゃないと、

おくに 何だって、

お滝 品のない二人は引っ込んで、閃之介様はあたしが、

おせん 何言ってるの、あたしが、

おふさ あたしよ、

お滝 だからあたしが、

閃之介 おいおい、おめえ達ちよっと待ってくれ、(階段を降りながら)道を開けてくれ。

おふさ 閃様、

お滝 閃様、

閃之介 ちよいと野暮用が出来たようだ。

お若 閃様、

おせん 閃様ったら、

閃之介 先に戻っててくれ。

お若 だって閃様、

閃之介 すぐに行くよ、

お滝 逃げちゃ嫌ですよ。

閃之介 ああ分かってる。こいつはみんなでな、（お滝に金を渡す）

お滝 ありがとうございます。

女達口々に礼を言う。

おくに 早く戻ってくださいね。

おふさ 今夜は寝かせませんから。

おくに 待ってますからね。

女達、上手へ退場。

閃之介 万吉、花火はいいなあ。

万吉 閃さん、

閃之介 鍵屋の六代目が空いっぱい広がるでけえ花火をこさえるって息巻いてるそうだ。そうなったら大川端の人は今の百倍くらいに膨れ上がるんじゃねえかな。時代はどんどん変わって、なあ万吉、野暮なこと言っつてねえでその色男、放してやんな。

お梅 閃様、

万吉 閃さん、

閃之介 俺は地獄耳でね、おめえらのやり取りが聞こえちまった。この場は俺が預かるう。

万吉 しかし、足抜けを見逃したとあっちゃあ、しめしがつきやせん。

閃之介 そうか、しめしがつかねえか。

お梅 閃様お願いです、この人を、弥助さんを助けてやってください。この人あたしの事かばってください、

閃之介 お梅、俺もそう思ったが、この木戸内の事は全部万吉に任せてある。万吉にも立場つてもんがあるからな。

お梅 あたし、何でもします、この人を助けて貰えるんだったら何でもします。

閃之介 こいつは弱っちまったなあ。

お梅 あたし、あと半年で年季が明けるんです。でもこの人助けて貰えるんなら、十年でも二十年でも、何なら一生女郎続けたって構いません。

閃之介 それじゃあ、惚れたこの男と添い遂げる事も出来なくなる、それでいいのかい。

お梅
この人……この人あたしみたいなの女のために死んでもいいって言ってください。あたしはそれだけで、それだけで充分です。

弥助
お梅、

閃之介
よし、分かった。

万吉
閃さん、

閃之介
二人とも気に入ったよ。

万吉
だけど閃さん、

閃之介
万吉、おめえの顔も立つようにしよう。

万吉
てえと、

閃之介
おめえ弥助ってのかい。

弥助
はい、

閃之介 五年たったらここに帰ってきな。それまで気持ちが変わってなけりや、お梅と所帯を持ちやいさ。

万吉 閃さん、

閃之介 お梅、もう五年辛抱してくれるか、五年でいいんだ。

お梅 それでこの人の命が助かるんだったら、あたしは喜んで、

閃之介 おめえの方はどうだい万吉。

万吉 そりゃあ稼ぎ頭のお梅がもう五年いてくれるんなら、俺の方で言う事は何もねえですが、

閃之介 それで決まりだ。

お梅 閃様、ありがとうございます。

閃之介 言っとくがお梅、人の気持ちはどうつろい易いものはねえぜ。五年経つて、この男がおめえを迎えに来る保証はどこにもねえ。それでもいいんだな。

お梅
分かってます。

弥助
お梅、

お梅
例えその時会えなくっても、今ここで見せてくれたこの人の気持ちは本物だから。

金太
お梅姉さん、

お梅
こんな汚れた女郎の為に、本気で命を：女冥利に尽きるつてもんですよ。

閃之介
そうか。

弥助
心配するなお梅、俺は必ず、

閃之介
野暮はよしなつて、

弥助
えっ、

閃之介
先の事なんぞ誰にも分からねえ、そうだろ。お梅はそれでも構わねえつて言っただ、粹な話じゃねえか。おめえは野暮を言わずにさっさと消えるこつた。

弥助
だけど、

閃之介
おめえの気持ちは今口にしねえで、五年後に見せてやんな。

弥助
：分かりやした。お梅、すまねえ。(階段を駆け上がり下手へ退場。見送るお梅)

閃之介
もしあの男がおめえを迎えに来たら、そんな時や祝言の費用は全部俺が出してやる、盛大に祝ってやるよ。

お梅
閃様、

閃之介
岡場所から白無垢で輿入れなんてのも乙なもんだ。

お梅
ありがとうございます。ご恩は一生、一生忘れません。

万吉
金太、(金太にお梅を連れて行くよう促す)

金太
へい。姉さん行きますよ。

閃之介に深々と頭を下げるお梅、優しく頷く閃之介。お梅、金太と手下達に連れられ

上手に退場する。万吉と閃之介だけが残る。顔を見合す二人。

万吉　　閃さん、あんたって人は、

閃之介　　何だよ。

万吉　　あきれた人だ。

笑う閃之介。土手の上、下手より顔を出す弥助。

弥助　　あの、もうよろしゅうございますか。

閃之介　　ああ、ご苦労だったな。(階段を降りてきた弥助に金を渡す)ほらよ。

弥助　　こいつはどうも。

閃之介　　おめえ、江戸を出るんだって。

弥助　　へえ、昔馴染みに誘われました、

万吉　　やっぱり、役者をやるのかい。

弥助 ええ、ドサ回りの田舎芝居ですが。

閃之介 中々どうして、さすが本職だよ。客には惚れねえって評判のお梅がコロリだもんな。

弥助 あの、そんな事もねえとは思いますが、もし又お梅さんとばったり会うような事があつたら、

閃之介 そんな時や、そんな事もあつたつけなつて笑ってりやいいさ。ちよいとがっかりするだろうが恨むような女じゃねえ。

弥助 …分かりやした。じゃああつしはこれで。

閃之介 ご苦労さん。(弥助、階段を上がり下手へ退場)何だよ万吉その顔は。

万吉 いえ別に、

閃之介 お梅の客あしらいがぞんざいになつたつて、泣きついて来たのはおめえじゃねえか。

万吉 だから俺は何も、ただ、いつもながら手の込んだ芝居で、

閃之介　　こういう細かい事が肝心なんだ。女つてのは気持ち一つでどっちにでも転ぶ。これでお梅はもう五年、それも俺に恩義を感じながら身を入れて客を取る。

万吉　　違えねえ。

閃之介　　お梅がまともに店に出たら月に十七、八両、一年だったら二百両だ。そいつが五年、分かるか、今の芝居で千両箱一つ拾ったようなものだ。

万吉　　確かに、年季明け待って半年たらたらされるのと比べたら、えれえ違いですね。

閃之介　　そういう事だ。

万吉　　しかし、どうして五年なんです。

閃之介　　そこんところが大事なさじ加減よ。本人が十年でも二十年でもと言ってる時に五年と言われりゃ、そんなに短くていいのかって思うだろ。

万吉　　しかし、

閃之介　　若く見えてもお梅は二十五だ。

万吉

え、

閃之介

どのみちあと五年したら大して客もつかなくなる。一番売れる時に本気で稼いで貰ったほうが得だって話よ。

万吉

そうか、恐れ入りやした。

閃之介

だがな、こんなのはやっぱり小せえ話だ。

万吉

閃さん、

閃之介

万吉、今この江戸には將軍様より金を持った男がいる、そいつは誰だ。

万吉

紀伊国屋文左衛門です。

閃之介

そうだ、上方で流行り病が出たと聞いた時、その文左衛門は何をした。

万吉

江戸で塩鮭を買い占めて上方に運びやした。

閃之介

その通り、鮭は飛ぶように売れたよ、流行り病には塩鮭が一番効くと噂を流したんだ。

万吉
とんでもねえ野郎です。

閃之介
江戸の街の大半、城の天守閣まで焼いちまった明暦の大火じゃ、木曾の材木を一手に買い占めて百万両の金を手にした、百万両だぜ。

万吉
俗に言う振袖火事、出火元は本郷丸山の本妙寺です。

閃之介
そう、火元がはっきりしていたのに、今でも文左衛門が仕組んだんじゃねえかって言う奴もいるくらいだ。

万吉
そう言いたくもありませんよ、間が良すぎます。

閃之介
紀伊国屋文左衛門は運と才覚を兼ね備えた化け物だ。

万吉
まさに金儲けの権化。

閃之介
だがな、俺が目指すのはその化け物なんだ。

万吉
閃さん、

閃之介
今に見てろ。俺は必ず紀伊国屋文左衛門の上に行く。

万吉 閃さんなら出来ますよ。

閃之介 剣術の腕を磨いたり、戦の手柄で世に出るなんてのは昔の話だ。

万吉 今じゃ侍が金貸しに頭を下げる。

閃之介 これからは金のある奴の天下よ。

万吉 その通りです。

閃之介 しかしな、あの文左衛門と比べたら俺がやってる事はどれも真っ当すぎて旨味が少なすぎる。

万吉 岡場所、金貸し、口入れ屋がですか、人が聞いたら何と言いますやら。

閃之介 俺は紀伊国屋文左衛門の上に行く男だ。

万吉 さいでした。

閃之介 こんなちまちました稼ぎで終わってたまるか。

万吉 終わりませんよ。

閃之介 万吉、俺について来るか。

万吉 地獄の底まで。

笑う閃之介と万吉。

長吉 (物陰から)おいらも一緒に連れてってくれよ、

万吉 誰だ、

長吉 (登場)その地獄の底まで。

万吉 何だこのガキ、

長吉 ガキじゃねえ、長吉ってんだ。あんた青井閃之介だろ。おいら、あんたに会いに来たんだ。

万吉 寝ぼけたこと言いやがって、あっち行け。

長吉 お前引っ込んでろ、

万吉

何だと、

長吉

雑魚に用はねえ。

万吉

このガキ、ふざけやがって、

閃之介

まあ待て万吉、その長吉様が俺に何の用だ。

長吉

おいらに商売を教えしてくれ。

万吉

何だ、

長吉

おいら金持ちになりてえ、だから、あんたの弟子になるんだ。

閃之介

俺は学者でも兵法者でもねえ、弟子なんかとらねえよ。

長吉

信州から出てきた。

万吉

信州だ、

長吉

だから絶対に弟子にして貰う。

万吉 閃さん、大方口減らしで家を出された百姓のガキですよ。行きましょう。

閃之介 坊主、小遣いをやろう。これを持って国に帰りな。(銭を投げる)

長吉 (銭を取って投げ返す) 馬鹿にすんな。

万吉 (銭を拾い) 優しく言ってもらってるのに、

閃之介 まあいい、行こう万吉。

万吉 へい、

立ち去ろうとする閃之介と万吉。

長吉 (叫) 喋っちゃまうぞ。(立ち止まり、振り向く閃之介と万吉) さっきの話、あのお梅ってお女郎に全部喋っちゃまうからな。

万吉 何だと、

長吉 黙ってて欲しかったら、おいらを弟子にしろ。

万吉
この野郎、とんでもねえクソガキだ。

閃之介
大した小僧だ、大人を相手に取引か。

長吉
そうさ、おいら命がけだ。

閃之介
命がけか。(笑)

長吉
本気だぞ。

閃之介
分かった。じゃあ、おめえがそう言うなら、俺もおめえを一人前の男として話をしよう。

長吉
言っとくけど、おいらあのお女郎みたいに騙されないからな。

閃之介
あんな、おめえが本当の事を話しても、お梅は喜びやしねえんだ。いや
それどころかおめえを恨むかも知れねえ。

長吉
何でだよ。

閃之介
この木戸門の内側に生きてる女郎の生き死には、すべて俺の手の中にある。理屈なんか通つていようといまいと、俺がお梅に一生女郎でいろと

言ったら、あいつはそうするしかねえからだ。

長吉 あんた悪党だ。

閃之介

そう、俺は悪党だ。だがな、悪党の俺がなぜ力ずくでお梅をねじ伏せねえ。お梅の為だよ。騙されてりゃああいつは誰を恨む事もねえ。いや、毎日お天と様に感謝しながら生きていられる、そうだろ。おめえが本当の話をして誰が得をする、誰が喜ぶんだ。

長吉

…。

閃之介

背中にごっくり傷口が開くまで青竹で打ち据えられて、泣く泣く女郎を続けるあの女を見たけりゃ、本当の事を話すんだな。

長吉

…。

閃之介

弟子にや出来ねえから、一つだけ教えてやったんだ。これが大人の、命がけで生きて行く厳しさだ。

長吉

…。

万吉

閃さん、行きましよう。

長吉に背を向け、上手に向かって立ち去ろうとする閃之介と万吉。

長吉

(叫)嘘っぱちだ。(立ち止まる閃之介と万吉)そんなの嘘っぱちだ。おいらには分かるぞ、あのお梅ってお女郎は、おいらの事を恨んだりしねえ、だって、だって、弱い奴にだって意地はあるんだ、騙されての方が嬉しかったなんて思わねえ。おいらだったら、おいらだったら、殺されても本当の事を知りてえ。

閃之介

…坊主、

長吉

長吉だ、

閃之介

面白え奴だ。口減らしで家を出されたのか。

長吉

違わい、兄弟増え過ぎちまって親が汲々言ってるから、こつちからおん出てやったんだ：いなくなったからって、探す様子も無かったけどな。

万吉

先の日照りで、信州じゃあそこらじゅうの木に百姓の首くくりがぶら下がってるそうです。

閃之介

そうか、それじゃあ、死んでも悲しがる奴はいねえって事か。

長吉　　そうだよ。だから何なんだよ。

閃之介　万吉、布団部屋の隅に坊主の、あいや、長吉の場所を用意してやんな。

万吉　　閃さん、

長吉　　本当かい、

閃之介　長吉、俺は弟子なんか取らねえ、だから教えて貰えるとは思うな、知りてえ事はてめえで盗め。今日からおめえはこの青井閃之介の将棋の駒だ。

長吉　　将棋の駒、

閃之介　俺が指す将棋はでかいぞ。駒は大事につかう、だがな、王手かける時は捨て駒も容赦なく使う、覚悟しろ。

長吉　　え…、

笑う閃之介、明転。

江戸の街中、口上を並べる瓦版屋の闇雲堂。聞きつけて集まって来る町人達。

闇雲堂

さあさあさあ寄っておいで見ておいで、（似顔絵を）この男青井閃之介、一体何者だ。三年前江戸の辰巳に忽然と現れて、傾いていた娼館孔雀楼をその女郎達ごとまとめて買い取ったって話は有名だが、この時に青井閃之介がぼんと出したのが千両箱みつつ、何と三千両というから驚きだ。そんなの誰でも知ってるよ。

松

留

闇雲堂、もっと新しいネタはねえのかよ。

お徳

それよりこの似顔絵は幾らなのさ。

闇雲堂

ダメだよ、これは商売道具。とにかくこの時の三千両が、

松

だから、そんな話だったらここの猫や鼠だって知ってるよ。

闇雲堂

まあまあ慌てなさんなって、

お徳

瓦版買ったら、晩のオカズが一品減るんだよ。

留

そうだ、古い話をいつまでも引っ張ってんじゃねえよ。

闇雲堂

ちよつと待て。例え一部五文のはした金とは言え、お前さんたち貧乏人から御ぜぜを貰ってる瓦版だ、(瓦版を)ここにはちやんと本邦初公開、誰も知らないだが知りたい、極めつけの謎の真相が載っているのさ。

お徳

何だい、その謎って言うのは。

闇雲堂

聞いて驚くな、何と、何と、

松

だから何なんだよ、

留

早く言えよ、

闇雲堂

青井閃之介は、実は、さる、さる御大身の御落胤、

松

何だいそのゴタイシンノゴラクインってのは、

留

つまり、偉いお武家様の隠し子、て事か。

闇雲堂

そう、青井閃之介のあおいという名前、実は：(不明瞭に発音して)みふばあほひの葵から、とった名前で、(自分の口を押さえ、怯えた表情で)あり、言っちゃまったよ。

松 何だ、

留 何だよ、

お徳 分かんないわよ、

闇雲堂 だから、(口ぱくで)ミツバアオイ、

お徳 みつばあおい？

闇雲堂 シー、めったなことを言わねえでくれ。

留 というと、

松 ジャン、ジャジャジャ、ジャンジャン、

お徳 この紋所が目に入らないか、

留 将軍様の隠し子、

闇雲堂 (留の口を押さえ)声がでけえよ。下手したら俺のこの首と胴体が泣き分

かれゝなんて話なんだよ。

松
本当か、

お徳
本当の話かい。

留
闇雲堂、おめえ、

闇雲堂
そう、だから他言は無用と言いたいところだが、てめえの命惜しんで書か
なかつたと言われたらこの闇雲堂、瓦版屋の面子が立たねえ。

松
て事はその中に、

闇雲堂
真相は全部書いてある。はい一部五文だよ。数に限りがあるから早い者
勝ちだ。

松
ほらよ、

闇雲堂
まいど、

お徳
はい五文、

闇雲堂
はいありがとう、はいまいど、はいありがとうとさん、（松の瓦版を覗き込

んでいる留に)おいおいおい、まわし読みはお断りだ、銭払って読んどくれ。

留 けちな野郎だ、(金を渡す)

瓦版を奪い合う町人達。上手から高倉主水、佐平を連れて登場。遠巻にこの騒ぎを見ている。舞台手前中央に進み瓦版に見入る松、留、お徳の三人。

松 (瓦版を読みながら) 何々、おいちよつと待て、何だこりや、

お徳 やっぱり「みふばあほひ」だよ。

留 肝心なところはどこも伏字だ。

松 そんな事より最後のこれは何だよ、

留 うん？

お徳 「世知辛い浮世にこんな話が真実だったら」

留 「何と夢のある話ではあるまいか」だと、

松 闇雲堂、てめえ、

闇雲堂 今日はこちらまで、(逃げ出す)

留 待ちやがれ、

闇雲堂 また来週、

お徳 錢返せ、

松 この野郎、

留 闇雲堂待て、

逃げる闇雲堂、追う町人達、下手へ退場。後に残る主水と佐平。佐平、落ちている瓦版を拾い主水に渡す。

主水 際どいが名前は伏せて、最後にしつかりこれは与太話だと書いてやがる。

佐平 絵草紙も狂歌も近頃はみんなこんな按配です。

主水 まあな。

佐平 貧乏の憂さを、こんなざれ言で晴らしてるんですよ。

主水 (瓦版を見ながら) だから目くじら立てる程の事じゃねえか、

佐平 ええ。

主水 確かにそれだけだったらな。

佐平 え、

主水 近頃売り出しの青井閃之介、どうにも気になる。

佐平 旦那、

主水 わずか三年足らずでこの界隈の岡場所を牛耳ってしまった。今に吉原以外の色街は全部青井閃之介の物になるんじゃないやねえかって勢いだ、大した策士じゃねえか。

佐平 その通りですが、この瓦版は埒も無いざれ言で、

主水 そうだな、これを読んだからって青井閃之介が將軍様の御落胤だなんて

本気で思う奴はいねえ、そうじゃねえと書いてあるしな。

佐平
そうですよ。

主水
しかしその先はどうだい、

佐平
先、

主水
読んだ後、人に話す時さ、百人が百人そのまんま伝えるかい。

佐平
え、

主水
流言蜚語、噂ってのは面白おかしく尾ひれをつけて広まるもんだ。

佐平
と言いますと、

主水
まさかとは思うが、もしそこまで計算づくだとしたら…。

佐平
高倉の旦那、

主水
佐平、あの瓦版屋、ちよいと洗ってみよう。

佐平 へい、

孔雀楼の前、縁台を出して話をしている休日の女郎達。短冊を手にしたおくと、お滝、おせんの三人。

お滝 だからねこれ「じよろうばなつて」って書いておみなえしって読むのさ、

おくと ふくん、

おせん 何で、おみなえしはおみなえしって書くでしょ。

お滝 だから漢字の話、

おせん 漢字、

おくと 成る程ね、という事は閃様のこのお歌は、

お滝 そう、空の花火と、あたし達女郎の儂さを女郎花に掛けてさ、

おせん ねえ、何で漢字ってあんの、

お滝 知らないよ、

おくに 粋なお歌じゃないか。

お滝 そういう事なのよ。

おせん ねえ、どうしてかながあるのに漢字が必要なの、

お滝 知らないつつてるでしょそんな事、

おくに やっぱり閃様、学があるよね。

お滝 だからね、あの噂だってあながち与太話とは言えないかも知れないよ。

おくに じゃあ閃様は本当に、

おせん お滝姉さん自分が知らない事を人に教えてんの、

お滝 だから、かなとか漢字とかどうでもいいの、

おせん 良くないよ、あたしはかなしか読めないんだからね。

お滝 だったら読めるようにしなさいよ。

おせん

あく何、自分が少しくらい読み書きが出来るからって、

お滝

静かにしないと殴るよ。

おせん

ひどいく、

おふさ

(団子を食べながら登場) 何、何かあった、どうしたの、

お滝

また食べてるのかい、おふさちゃん、

おふさ

大きなお世話。

おくに

あんたの口は食べてるか喋ってるか、休まる時が無いね。

おふさ

おくに姉さん、日なたに長いこといたらまた顔のシミ増えちゃいますよ。

おくに

何だって、

おふさ

心配してやってんのよ。

お滝

でものだかない日だね。

おせん
ねえねえ（短冊を示し）この漢字、何て読むか分かる。

おふさ
何、漢字、あたしに訊いてんのかい、

おせん
うん、これじよろうばなって書いてさ、

おふさ
はばかりながらこのおふさ姉さん、中途半端はやらないのさ、こんなもの、どっちが上か下かも分からないよ。

おせん
ある意味尊敬、

お若
（登場）あゝ、やっぱりおふさ姉さんだ、あたしの団子、

おふさ
あら、あたしの鏡台の脇にあったのよ。

お若
返してよ、返してよお団子、

おふさ
（残りを口に押し込み）もう食べちゃった。

お若
ひどいよ、

おくに うるさいわよ、あんたたち、ぴーちくぱーちく、

お若 だって、

おふさ 今度買って返すわよ。

お滝 それにしてものどかない日だね。

おふさ そうよね、本当にのんびりしてさ。

おくに こんな恵まれた岡場所、日本中探しても絶対に無いよ。

お若 あたしの団子、

おふさ しつこいね。

お滝 月の内に二日もお休み頂けてさ、

おくに 女郎の骨休め考えてくれる岡場所なんてねえ。

お滝 それもこれも、みんな閃様のおかげ、

おくに あたしが風邪をこじらした時だつてさ、

お若 おくに姉さんが風邪ひいた時どうしたの、

おくに 無理するな、しっかり治さなきゃいけねえよつて、あの流し目で、

おふさ おくに姉さんに流し目、

おくに 胸がきゅくんだよ。

おせん 正面から見たくないつてのは、流し目とは言わないわよね。

おくに 何だつて、

お滝 まあまあ、

おふさ でもね、閃様は本当に優しい人だよ。

おくに そうだよね。

おふさ あたしね、こないだ妹に手紙を出したのさ。

おせん
妹さん、

おくに
ああ確か、お若ちゃんと同い年の、

お若
あたしと同い年、

おふさ
そう、だからお若ちゃん見てると他人のような気がしなくてね。

お若
それであたしの団子食べちゃう訳、

おせん
まあいいじゃない。

おふさ
うちも貧乏だし、お父つあんもだらしなから心配してたんだけど、今年になってその妹もやっぱり身売りに出されちゃって、

おくに
そうだったの、

おふさ
それが番匠町の岡場所だって話でね、

お滝
番匠町だったら日本橋、すぐ近くだよ。

おふさ
そりゃ知ってるけど、まさか会いに行く訳にもいかないじゃない、

お滝

まあね、

おくに

お互い籠の鳥だもんね。

お若

それで手紙を、

おふさ

だけどあたしや字なんて書けないだろ。

おせん

あ、そうだよね。

おふさ

それにここと違って妹のいる岡場所は親兄弟の手紙なんか取り次いでくれないのさ。

お滝

それが普通だよ、岡場所なんて。

お若

じゃあダメじゃない、

おふさ

でもね、あたしが金太さんにそんな話をしたのが閃様の耳に入ったらしいのよ、

おくに

閃様の、

おせん

それでどうしたの、

おふさ

俺が一肌脱いでやろうって、

おくに

本当かい、

おふさ

代筆した手紙を、客のふりした若い衆に託してくれたんだよ。

お滝

じゃあその手紙、妹さんに、

おふさ

分かんない、

お若

分かんないって、

おふさ

妹はお君って言うんだけど、そんな名前の女郎はいなかったって、

お滝

まあ、普通本名で出てる方が珍しいからね。

おふさ

それで、女衆の一人に妹が分かったら渡してくれって、

おせん

その手紙を、

おふさ 閃様に言われて、頼む時には心づけの銭も添えてくれたらしいのさ。

お滝 そう、

お若 閃様、優しいよね。

おふさ だからね、手紙が妹に渡らなかつたとしても、あたしや閃様にはどんなに感謝してもしきれないって気持ちなのさ。

おくに 本当にありがたい話だね。 (明転)

夜、孔雀楼の中にある閃之介の部屋。閃之介と手下達、万吉、金太、お涼、オババ、闇雲堂、長吉。

万吉 馬鹿野郎、

闇雲堂 申し訳、ありません。

万吉 謝って済む事か、

闇雲堂 あの触れ書きが、気になって、

お涼 だからこんな瓦版を、

万吉 浅知恵もいとこだ。

闇雲堂 ……だけど、

お涼 馬鹿だよ、闇雲、

闇雲堂 お涼姉さん、

お涼 確かに、締め付けがきつくなりやあ商売はやりにくくなるけど、それにしたって（瓦版を見る）…。

金太 將軍様のご落胤、

お涼 やり過ぎだよ。

闇雲堂 ……それとなく、噂になれば…。

万吉 役人が恐れて手を出せなくなるってか、

闇雲堂

へえ、

万吉

逆に、目をつけられるって事はなぜ考えねえ。

闇雲堂

：そう、ですね。

お涼

三葉葵：いくら与太話だと書いてあっても：

万吉

洒落じや済まされねえかも知れねえな。

闇雲堂

：

万吉

閃さん、どうします。

閃之介

うん：確かに笑って済まされる話じゃねえな。

闇雲堂

閃さん、

閃之介

いや闇雲、こいつはてめえの命くらいじゃ済まねえしくじりかも知れねえ。

闇雲堂

え、

一同、閃之介を見る。

閃之介

：まあ、闇雲をどうするかの前に、せっかくみんな顔を揃えてるんだ、今夜はまず、吉原の大門に立てられたってその触れ書の事を話そうか。オババ、おめえどう思うよ。

おばば

さあどうだろ、そんなのあたしや見てないからね。

閃之介

（笑）相変わらず呑気なもんだな。万吉、かいつまんで話してくれ。

万吉

へい、一月前に出された高札です。今後吉原以外の色街はご法度って事で、岡場所、出会い茶屋の類はまかりならぬってお触れ書きです。

閃之介

て事だ、

万吉

確かにその後しつこい手入れを食らって立ち行かなくなった岡場所もあるようです。

閃之介

まあそんな話だが、どうだいオババ。

おばば

何かと思えばそんな事かい、お上も馬鹿じゃないさ、本気で岡場所を根

絶やしにしようなんて思っちゃいないよ。

お涼
そうなの、

おばば
ああ、岡場所がなくなっても、一人で稼ぐ湯女や夜鷹が増えるだけだろ。
あいつらからは賂も搾れないからね。

閃之介
俺もそう思う。

おばば
あんたらには初めてだろうけど、そんな高札は前にも何度か出てるよ。

万吉
て事は、

おばば
慌てず騒がずさ。

お涼
そうか。

閃之介
お墨付きは吉原一つという建前を守る為だろう。おそらくいくつかの岡場所は潰すつもりだろうが、都合の良いところはこれまで通り見て見ぬふりだよ。

金太
じゃあ、うちは、

閃之介
鼻薬はたっぷり嗅がしてあるさ、袖の下へその下、役人どもの弱いところ
はちやんと押さえてある、なあ万吉。

万吉
ええ、

お涼
それじゃあ、

閃之介
気兼ねなくこれまで通りにやってくれ。

金太
分かりやした。

閃之介
お涼、念の為に、この件での町方の動き探っておいてくれ。

お涼
あいよ、

閃之介
そうだ、長吉も一緒にな。

お涼
えっ、

閃之介
手下で使ってやんな。

お涼　　ガキは嫌いだよ。

長吉　　おいらだって女なんかと、

お涼　　何だって、（睨み合う二人）

閃之介　　おいおい、こいつは仕事だぜ。

お涼　　だから言ってるんだよ。

閃之介　　女と子供、こんないい組み合わせはねえ、隠れ蓑には一番だ。

長吉　　チエ、

閃之介　　さて、闇雲、おめえの話に戻るかな。

闇雲堂　　閃様、申し訳ありません。

閃之介　　言つたる、謝って済む話じゃねえ。下手したらこの俺がお縄を頂戴する
かも知れねえって事だ。

闇雲堂　　…。

閃之介
かと言って、おめえの命くらいじゃどうにもならねえ。いいか闇雲、こ
うなったら死に物狂いで、もっともっと与太話を流すんだ。

闇雲堂
えっ、

閃之介
例えば、青井閃之介は義経の生まれ変わりだとか、天狗の化身で空も飛
べるとかな、

万吉
閃さん？

閃之介
そうすりゃ、御落胤だ何だって話も数限りない与太話の一つになって目
立たなくなるだろ。

万吉
なるほど、

金太
そうか、

お涼
さすがは閃さん、

闇雲堂
分かりました。

金太 良かったな。

閃之介 なあ闇雲、

闇雲堂 は、はい、

閃之介 おとつい相模屋の前の往来でな、腰の曲がった爺さんが炭俵をいっぱい載せた大人車を引いてたそうさ。

闇雲堂 え？

閃之介 そこへ野良犬が飛び出して来た。爺さんは慌ててよけようとしたんだが、まぬけな犬はてめえから車輪の下に飛び込んで足を轢かれちまった。そこへ悪い事に侍が通りかかった。見ていた奴らの話では、身なりは良いが人相の悪い二本差し五、六人だったらしい。その後どうなったと思う。

万吉 まさか、

閃之介 そう、侍達は爺さんを斬り捨てた。お上のご定法に背いてお犬様に怪我をさせるとは不届きなりって訳だ。

金太 ひでえ話だ。

お涼

でも、このところ似たような話はいくらでもあるわよ。

閃之介

將軍様が下されたご定法、生類憐みの令だ、誰も文句は言えねえ。だがな、一体どれほどの奴が本気で犬猫の命を人の命より大事だと考える。

金太

侍以外、誰もそんな事思わないですよ。

閃之介

いや、侍だって本気で思っちゃいないさ。だのに、爺さんは斬られた、なぜだ。

万吉

忠義比べですね。

閃之介

そうだ。もし、通りかかった侍が一人だったら爺さんは殺されずに済んだろう。だがあいにく侍は何人かいた、そして、みんな思ったんだ、見過ごしたらお上への忠義を疑われるとな。

お涼

侍なんてみんな馬鹿ばっかだよ。

閃之介

畜生の命も大事にしろってのは悪い話じゃねえのかも知れねえ。しかし、下の連中の忠義比べは將軍様の評判を落とすだけだ。俺はな、俺の手下にはそんな役に立たねえ忠義比べはして欲しくねえ、功を焦るなよ

闇雲。

闇雲堂

閃様、

閃之介

いいか、紀伊国屋文左衛門は上方で流した噂一つで途方もねえ金を手にした。大江戸八百八町に流す風評は、千、二千の手下と同じくらいの働きだつてする筈だ。闇雲、おめえが思つてるよりずっと大事な仕事を、俺はおめえに頼んでるんだ、そこんところはおめえ自身が分かつてなくちやならねえ。

闇雲堂

せ、閃様、申し訳ありません。(感極まる)

閃之介

よし、分かつたらそれでいい、今度の事はもう忘れちまいな。

闇雲堂

ありがとうございます。

閃之介

さて、お涼、例の調べは進んでるか。

お涼

もちろんさ。両国に呉服屋が二軒、それから木挽町にある小間物屋と神田の米問屋、どれも表向きは羽振りのいい大店、だけど内情は火の車さ。

閃之介

狙い目つて訳だな、その話あとでじっくり聞かせてくれ。

お涼

あいよ。

閃之介

おばば、おめえの言った闇富くじ、金持ちだけを相手にするってのは妙案だが、富くじってのは買う奴が多いから成り立つもんだ。売値を高くしたら見合うだけの賞金も出さなくちゃならねえ、もう少し考えさせてくれ。

おばば

そうかい、

閃之介

万吉、番匠町の虎蔵の件はどうだい。

万吉

いい塩梅ですよ、なあ金太。

金太

へえ、明日にも虎蔵自身が出張って来そうな勢いです。

閃之介

そうか、おふさの妹に宛てた手紙は効果があったって事だな。

金太

ええ、鬼虎の奴、頭から湯気出して怒ってたそうです。

閃之介

(笑)じゃあ今度は、塩を振られたナメクジみたいにしおらしくなって貰おうか。